

2017

第23回

函館港イルミネーション映画祭

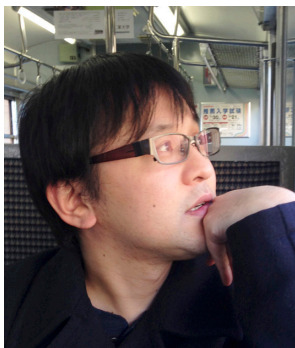
第21回シナリオ大賞

大森一樹賞〔審査員特別賞〕

村口知巳

雪のした





【作者プロフィール】

むらぐち ともみ

都内のシナリオ学校でシナリオを学ぶ。2013年函館港イルミナシオン映画祭にて審査員奨励賞受賞。

【あらすじ】

母の突然の死の知らせを聞き、実家に戻った祥子。実家暮らしで高校生の妹、千夏と叔母の手伝いもあり葬式はしめやかに行われ、会葬者には母が作った雪のした野菜がふるまわれた。しかし、祥子の心には悲しみよりもやるせなさに包まれていた。それは、小学生の時に消えた父と、母の間に起きたある出来事に関する事だった。

顔に生まれつきのアザがあった母。父は母のアザを見て毎日のように傷つける言葉を浴びせ、祥子は父をひどく憎んでいた。

そんな父が、祥子が小学生の頃に消えた。家族を捨て愛人と逃げた男と祥子以外の人とはそう思っていた。残された母は家の畑で

雪のした野菜を作り家計を支えるようになった。

母の葬式から数日経ち、遺品を整理していると抽斗の奥から小学生の頃、祥子が描いた母の似顔絵を見つける。その絵に付着した大量の血の跡を見て、祥子の脳裏に、あの日の記憶が鮮明によみがえる。

父が消えた日、祥子は台所で呆然と立ちつくす母と床に血を流して倒れた父の姿を目撃した。その後、少し目を離れた後、父は消え母は何事もなく振舞った。祥子は母から父に何をしたのかを教えてもらおうとした。それは母の罪を咎めるためではなく母を愛するが故、母と同じ罪を共有したい気持ちからだった。しかし、母は何も教えてくれなかった。祥子はそんな母と次第に

心の距離を取るようになった。

「母はわたしの事、ずっと遠ざけたかったんです」

そんな心に抱えていたわだかまりを叔母に告白する様子。すると叔母は、母がどんな犠牲を払っても娘たちに美しい人生を生きてもらいたい強い思いを持っていたことを伝える。

母の本当の愛情を知った様子。東京へ帰る日の朝、妹と一緒に、来年からの母の雪のした野菜を作ることを約束する。

【人物】

小川祥子(10ゝ25)

会社員

小川佳代子(30ゝ45)

祥子の母

小川千夏(3ゝ18)

祥子の妹

小川修二(39)

祥子の父

沢田美和(47)

佳代子の姉

田所陽一(18・25)

祥子の同級生

大城朱美(25・40)

修二の愛人

会葬者(男1)

会葬者(男2)

会葬者(男3)

会葬者(女1)

市場のおばさん

祥子の高校の担任

○函館山間部の集落（2017年3月）

雪解けの水が道路を流れる。

○小川家・全景

その集落にある古い一軒家。

家の裏手に小さな畑がみえる。

葬儀の鯨幕で覆われた家の壁。

坊主の読経がもれ聞こえる。

○同・居間

葬儀が執り行われている。

最前列に座る、小川祥子（25）と妹の千夏（18）。

祭壇には母、佳代子（45）の遺影。

佳代子の顔の右半分には大きな青アザがある。

会葬者のささやく声。

会葬者（女1）の声「まだ若いのに、ほんと気の毒……」

会葬者（男1）の声「下の子が来年、高校卒業で、少しゆっくり出来ると思ってた時だべ」

会葬者（男2）の声「で、結局、父親は来なかったのか？」

会葬者（男3）の声「来れるわけねえべ。佳代ちゃんと子供たち捨てて逃げた男だぞ」

会葬者（女1）の声「わたし見たのよ。まだ小学生だった様子ちゃんが、お父さんって叫んでて……ほんと可哀想だった」

涙ぐむ千夏とは対照的に真っ直ぐ祭壇を見つめる様子。

祥子「……」

○小川家・外の道（2002年12月）

一台の車が砂煙を立て走り去る。

その車に向かい、小学生の祥子（10）
が叫んでいる。

祥子「お父さん！ 何で行っちゃうの、お
父さん！」

○小川家・台所（現在）

会葬者への振る舞いの準備をする祥
子と千夏と叔母の沢田美和（47）。

美和「やっぱり、あのアザ、消してもらっ
た方がよかったんじゃない？ 今、簡単
に出来るんですよ」

千夏「いいの消さなくて。みんな知ってる

のに、消す方が不自然よ」

美和「でもねえ……」

千夏「お姉ちゃんは、どう思う？」

祥子「え？」

千夏「お母さんの遺影の写真のアザ、消し
た方がよかった？」

祥子「……どうかな」

千夏「どうかなって……お姉ちゃん帰って
から、ずっとぼんやり」

美和「仕方ないわよ。突然知らせ聞いて東
京から戻って来たんだから」

祥子「いや……その、ごめんなさい。お葬
儀の準備、ちーちゃんや叔母さんに全部
任せっきりで」

千夏「そんなの気にしなくていいよ」

美和「そうよ、他人行儀な事言わないで。

わたしだって、あの子の姉なんだから」

祥子「ありがとう……」

千夏、窓の外に見える畑を見やる。

千夏「……叔母さんが、最初に見つけてくれたんだよ、お母さんの事」

祥子「え……」

千夏「朝、畑の上に倒れてたの。ほら、ち

ょうど今、収穫の時期だから」

祥子「（も畑を見て）……」

○小川家・畑（祥子のイメージ）

雪で覆われた白い大地の畑。

チラチラと雪が舞っている。

畑仕事の恰好をした佳代子、雪の上

で倒れている。

○小川家・台所

千夏「そうだ、お姉ちゃん、ちょっと手伝って」

祥子「え、何？」

千夏、祥子の腕を取って外へ連れて行く。

○同・畑

千夏、スコップを持って来る。

祥子、その後を来る。

祥子「ちーちゃん、ケガしないでね」

千夏「お姉ちゃん、知らないと思うけど、

わたし、中学から、お母さんのこと手伝ってたんだよ」

千夏、力強くスコップを地面に突き刺し、雪ごと土を掘る。

祥子、足元の雪を踏みしめ、地面を見つめる。

祥子の脳裏に幼い頃に聞いた、佳代子の言葉がよみがえる。

佳代子の声「一度、野菜を雪の下に埋めたら、最初の雪解けの水が流れるまで絶対に掘り返しちゃダメなの」

○小川家・畑（2002年12月）

まだ雪の降り積もる前の畑。

佳代子（30）がクワで畑を耕している。

佳代子「それが野菜を美味しくさせる一番の秘訣」

少し離れた場所で作業を見つめる、

祥子（10）。

祥子「お母さん……お父さんは？ お父さ

ん、どこ？」

佳代子「……」

祥子「ねえ、お母さん！」

○小川家・畑（現在）

千夏「お姉ちゃん、あった！」

祥子「（ハツとして）えっ？」

千夏、地面から掘り起こした土まみれの人参を持っている。

千夏「ほら懐かしいでしょ、お母さんの野菜」

祥子「……」

○同・居間

テーブルを囲む会葬者たち。

佳代子の野菜を使った料理を次々に運んで来る千夏と美和。

千夏「みんな、おまたせ」

会葬者（男1）「よつ、待ってました！ 佳

代ちゃんと言えば、やっぱりこれだ」

会葬者（男2）「佳代子の雪のした野菜って

言えば、この辺で知らねえやつ、いねえべ」

会葬者（男1）「（一口食べて）ああ、やっぱり、

うめえな。こんなうめえのが、もう二度

と食べねえなんてよ……」

会葬者（女1）「バカ！ あんたがしんみり

してどうすんの。（千夏に）ほんと、ごめ

んね」

千夏「ううん。みんな、今日はお母さんの

ために、いっぱい食べて」

会葬者たち、思い思いに佳代子の野

菜について語りだす。

○同・台所

まだ採れたての雪のした野菜がダン

ボールに詰まっている。

祥子、まだ土で汚れた野菜をひとつ

手に取って見る。

祥子「……」

千夏が来て、

千夏「そういえば、お姉ちゃん、お母さん

の野菜、一度も食べたことなかったよ

ね？」

祥子「そうだっけ……」

千夏「今日ぐらい食べてあげたら」

祥子「……」

千夏「お母さん、可哀そうだよ」

祥子「あのさ……」

祥子、何か言おうとするが、千夏、

奥の居間から呼ばれて行ってしまう。

祥子「……」

○同・全景・夜（時間経過）

部屋の明かりが消えている。

○同・二階の子供部屋・夜

布団を並べて横になる祥子と千夏。

千夏「久しぶりだね。こうやってお姉ちゃんと一緒に寝るの」

祥子「うん……」

千夏「元気だった……って、今さら？」

祥子「怒ってる、一度も帰らなかったこと？」

千夏「別に……だってメールで、ずっと連絡取ってたし……あ、うん、でもちよつと寂しかったかな」

祥子「ごめんね……」

千夏「もう家族、お姉ちゃんとわたし、二人だけだね」

祥子「……うん」

千夏「本当は、今日、お父さん来るかなって、ちよつとドキドキしてた」

祥子「……」

千夏「わたし、お父さんの記憶ほとんどないし……お父さん、知らない女の人といなくなっただよだね？」

祥子「……うん」

千夏「その時の事、お姉ちゃん覚えてる？」

お姉ちゃん、怒った？ それとも寂しいって思った？」

祥子「……ホっとした」

千夏「え……」

祥子「お父さん、お母さんの事ずっとイジ

メてたから」

千夏「……ほんとに？」

祥子「……お姉ちゃん、あの頃、お父さん、
いなくなつて欲しいって、毎日、神様に
祈つてた」

○小川家・外（2002年9月）

祥子、小学校から帰ってくる。

畑仕事をする佳代子の姿がみえる。

祥子「お母さ〜ん！」

祥子、笑顔で手を振つて合図する。

佳代子も気づき手を振り返す。

○同・居間・夕

佳代子、洗濯物をたたんでいる。

佳代子の膝の上で遊んでいる千夏

（3）。

祥子は机で宿題をしている。

千夏「お母さん、ユーレイ？」

佳代子「どうして？」

千夏「保育園のお友達が、お母さんの事ユ
ーレイって言つてたの」

祥子「今度、友達から言われたら、その子
の髪、引つ張つたらいいよ」

佳代子「祥子、そんな事言わないの」

千夏「じゃあ、お母さん、ユーレイじゃな
いの？」

佳代子「このアザはね、お母さんが生まれ
たときからあるの。ときどきこれ見て、
怖がる人いるけど、お母さんはね、ユー
レイじゃないんだよ」

千夏「ふうん、そうなんだ」

祥子、カバンから一枚の丸めた画用紙を出し、照れくさそうに佳代子に差し出す。

祥子「お母さんこれ、今日、美術の時間に書いた」

佳代子「お母さんに？」

佳代子、画用紙を広げて見る。

絵具で描いた佳代子の似顔絵。

頬のアザは書かれていない。

佳代子「すごく上手。嬉しいな、お母さん。

ありがとう」

祥子「（照れくさい）」

千夏「お顔の模様ない」

祥子「ちーちゃん、うるさい！」

千夏「だって、ないもん！」

佳代子「ほら、二人とも喧嘩しない」

ほほ笑む佳代子。

と、玄関の引き戸が開く音。

その途端、祥子の顔が曇る。

佳代子「……そんな顔しないで。晩ご飯にするから、千夏と一緒に手洗ってらっしゃい」

祥子「うん……」

○同・玄関・夕

扉を開けたまま玄関に立ちつくしている、父の修二（39）。

佳代子、足早に来て、

佳代子「お帰りなさい」

カバンを取ろうとする佳代子。

修二、その手を突っぱねて、

修二「(玄関の外を見て) 今日も片づけられてなかった」

佳代子「え？」

玄関の外の地面に三輪車が転がっている。

修二「昨日もだ。何度言えばわかる？」

佳代子「すみません、すぐに」

と、片づけようと外へ出て行く佳代子。

修二、佳代子の足を引っ掛ける。

佳代子「！」

バランスを崩し、地面に転ぶ佳代子。

修二「お前は、ただでさえハンデのある人間なんだ。その分、他の事は人並み以上にしなくちゃいけない。そうだろう？」

佳代子「……はい」

修二、カバンを玄関に放り投げ、家の中に入って行く。

その様子を離れたところで見ている

祥子。

祥子「……」

○同・居間・夜

黙々と夕食を食べる祥子、佳代子、

修二。

千夏、ただ一人、テレビのアニメを見ながら笑っている。

修二「今日一人、新人が入って来てな、高

卒の全然使えないバカだ」

佳代子「そうですか……」

修二「うちの会社は、なんでああいふ使え

ないバカばかり採用するんだ」

佳代子「そうですね……」

祥子「でも大学行かなくても立派な人、いっぱいいるよ」

修二、ジロリと祥子を見て、

修二「誰だ？　言ってみろ」

祥子「イチローとか……」

修二「あれはスポーツ選手だ。頭を使う必要のない仕事だ」

祥子「そんな事ないよ。プロ野球選手ってすごく頭を使うって言ってたもん」

修二「お前、将来プロ野球選手にでもなるのか？　例えそうでも、あいつらはごく一部の例外だ。ほとんどの低学歴の連中は、ロクな仕事も出来ないで、グチグチ文句を言うだけだ」

祥子「じゃあ、お父さんは東京の大学に行

ったから偉いの？」

修二「何？」

祥子「お父さんて、東京のすごく頭のいい大学に行ったんだよね？」

修二「……少なくともそういう奴らより努力してきた」

祥子「でもクラスの子が言ってたよ。お父さんは東京で就職して、でも失敗して帰って来たって」

修二「！」

祥子「お父さんは負け組だって」

佳代子「祥子、やめなさい」

修二、箸を叩きつけるように置き、祥子を睨みつける。

祥子「（負けずに見返す）」

修二「……」

と、唐突に精気を失う修二。

テレビのリモコンをNHKのニュースに切り替えて音量をあげる。

修二「(ぶつぶつと) アニメなんか見てるとバカになる……」

修二、そのまま黙々と食べはじめる。

佳代子、グズりはじめた千夏をなだめる。

祥子「……」

○同・子供部屋・夜

布団を並べて眠る祥子と千夏。

すやすや眠る千夏の隣で悶々として眠れない祥子。

○同・廊下・夜

降りてくるパジャマ姿の祥子。

両親の寝室から明かりが漏れている。襖の隙間が少し空いている。

○同・寝室・夜

寝支度を整える佳代子。

煙草を吸っている修二。

修二「お前がきちんと教育できてないから、ああなるんだ」

佳代子「すみません……」

修二「二度とああいう口の聞き方するなと言っておけ」

佳代子「わかりました」

修二、佳代子の似顔絵を見つける。

修二「なんだこれ、お前か？」

佳代子「学校で描いてくれたんです」

修二「下手くそだな」

佳代子「でも一生懸命書いてくれました」

修二「そうか、わかった。顔のアザが足りないんだな」

と、修二、顔の部分に煙草の灰を押し付けようとする。

佳代子「やめてください！」

佳代子、修二から絵を奪い取る。

修二、勢いで煙草を膝に落とす。

修二「あちっ！」

佳代子「あ！」

修二、憎しみに顔を歪ませ、佳代子の顔のアザを強く掴む。

修二「お前は一体、誰のおかげでまともに暮らせてると思ってる？ お前のような、

醜い女、本当なら誰も貰い手なんかなかったんだぞ！」

佳代子「……痛い」

修二「俺がいなけりゃ、お前のような醜い女、のたれ死ぬんだ！」

佳代子「すみません……」

修二「(離して) 気分が悪い……今日はあっちで寝る」

修二、出ていく。

佳代子「……」

○同・廊下・夜

修二、来る。

祥子がいる。

修二「……まだ起きてたのか？」

祥子「どうして、お母さんイジめるの？」

修二「誰がイジめてる？」

祥子、修二を指差す。

修二「イジめてない」

祥子「ウソ、イジめてる！」

修二「人を指差すんじゃない！」

しかし、祥子は止めない。

修二「……その目、母親にそっくりだな。

お前もそのうち醜い女になるぞ」

修二、行く。

睨みつける祥子。

○同・外・翌朝

仕事へ向かう修二を見送る、佳代子。

修二「今日は遅くなる」

佳代子「お気をつけて」

修二、玄関脇の三輪車を一瞥し、

修二「今日は、ちゃんと片付けておけ」

佳代子「……はい」

修二、行く。

祥子、来る。

祥子「ちゃんと片付けたのに、昨日」

佳代子「ん？」

祥子「ちーちゃんの三輪車。わたし、ちー

ちゃんと一緒に片付けたの」

佳代子「そう……」

祥子「お父さんがいじわるしてるんだよ、

きつと」

佳代子「……」

祥子「ねえ、お母さん、三人でどっか行こ

うよ。わたしとお母さんとちーちゃん、

お父さんのいない場所。このままじゃ、

お母さん可哀そう」

佳代子「どこ行くの？」

祥子「え……」

佳代子「こんなお母さん、どこに行けばいいの？　そこで幸せになれる？」

佳代子、家に戻っていく。

祥子「……」

○小川家・外・朝（現在）

一台の車が家の前に停まる。

○同・居間・朝

葬儀を終えて、部屋の大掃除をする

祥子と千夏。

玄関のチャイムが鳴る。

千夏「わたし、出る」

○同・玄関・朝

千夏、玄関を開けると、田所陽一

（25）が立っている。

千夏「どなた……ですか？」

陽一「あ、田所です。祥子さんの同級生の

……もしかして千夏ちゃん？」

千夏「はあ……」

○同・佳代子の部屋

仏壇に向かって拝む陽一。

後ろに控える祥子。

陽一「この度は、ご愁傷様で」

祥子「改まってる」

陽一「そりゃ改まるだら」

祥子、少し笑う。

千夏、お茶を持って来る。

千夏「よかったら、お茶……」

陽一「ありがとう。ていうか千夏ちゃん、大きくなったね」

千夏「まあ、そりゃ……」

陽一「俺の事、覚えてる？」

千夏「覚えてます……お姉ちゃんの元カレ？

たまに家に来て遊んでくれました？」

陽一「あの頃、まだ小学生だった？」

祥子「ちーちゃん、あっち行っててよ」

陽一「懐かしいな本当」

千夏「あの、本当なんですか？ 昔、お姉

ちゃんと駆け落ちしようとしたって？」

祥子「ちーちゃん！」

千夏「別にいいじゃない。昔のことなんだし」

陽一「参ったな」

祥子「ねえ、ちよつと外出よう」

○陽一の車の中

運転する陽一と助手席に祥子。

祥子「どうしたの急に？」

陽一「ん？ いや帰ってるって聞いて何か会いたくなって……」

祥子「そう」

陽一「そうって、テンション低いな」

祥子「何してるの今？」

陽一「カフェ、港の方」

祥子「陽一っぽい。昔からオシャレだった

もんね」

陽一「本当は東京でも行きたかったけど、

ダラダラしてて、気づいたらずっと地元」

祥子「いいじゃない、それで」

陽一「祥子は、すぐ東京行つたべ」

祥子「まあね……」

陽一「楽しい、東京？」

祥子「普通」

陽一「そう……まあ、そうだな。どこでも

意外と普通なんだよな」

祥子「……」

○町の一角

数軒の飲み屋が集まっている寂れた

飲み屋通り。

赤信号で停まる陽一の車。

○陽一の車の中

窓外からある一軒の店に目を止める

祥子。

それは、かつてスナックだった空き

店舗。

色褪せた看板にスナック『朱美』の

文字。

祥子「あの店……」

陽一「ああ、あそこまだ、あのまんまだ」

祥子「お父さん……あのお店の人といなく

なったんだよね」

陽一「連絡なかったの、父親から？」

祥子「……うん」

陽一「そう……」

信号が変わり車が発車する。

祥子「わたし、一度、あの店の前でお父さ

ん見たことある」

○スナック『朱美』前・夕（2002年11月）

買い物袋を下げて歩く祥子と千夏。

千夏「お姉ちゃん、帰ったらプレステやら

して」

祥子「ダメ」

千夏「なんで！」

祥子「ちーちゃんには、まだ早い」

千夏「早くないもん。できるもん！」

駄々をこねる千夏。

と、祥子、スナックのドアから出て

来る朱美と修二を見つける。

祥子「！」

朱美、修二の首に腕を巻きつけ耳元

に何やら囁いている。

ニタリと笑みを返す修二。

祥子、とっさに千夏の目を塞ぐ。

千夏「わっ！」

祥子「……だあれだ？」

千夏「お姉ちゃん！ だってお姉ちゃんし

かないないもん（と言いながらも遊んでく
れてるものと思いい喜んでいる）」

修二、祥子たちに気づく。

修二「……」

祥子「……」

修二、何も言わず、車に乗り込み出
発する。

朱美、祥子を見て意味ありげにほ

笑む。

祥子「……」

○陽一の車の中（現在）

祥子「そのあと、少しして、いなくなったの、

お父さん……」

陽一「ウチのお袋が言ってた。あんなマジ

メな人が意外だったって」

祥子「へえ、お父さん、周りからはそんな風に見られてたんだ……」

○神社・境内

小高い山の階段を上った先にある古い神社。

人気はない。

階段に腰かけて缶コーヒーを飲む、

祥子と陽一。

祥子「小さい頃、お母さんの実家に遊びに行ったとき、お祖父ちゃんとお祖母ちゃん、わたしに、こんなお母さんでごめんねって謝ったの。わたしはなんで謝られるのか全然わからなくて、でも、小学校に入って、クラスメイトからお母さんのアザの事言われて、ああ、わたしのお

母さんって、他のお母さんとは違うのかなってのはじめて思った」

陽一「……でも子供って、わりとそういうのに残酷っていうか」

祥子「別にそれはいいの、しょうがないって思うようになれたから。でも中学のときほとんど口も聞いたことなかったクラスの子から、わたしのお母さんとお父さんがお見合い結婚したこと教えられたの。顔にアザのあるお母さんと、人付き合いの苦手だったお父さんをお互いの親が無理やり結婚させたって」

陽一「……」

祥子「それ聞いて、お母さん、本当はお父さんと結婚なんかしたくなかったのかなって思った……もしかしたら、わたし、

生まれること望まれてなかったのかなっ

て」

陽一「そんなわけないって……ていうか、誰だよ、祥子にそんなの言った奴？ 今から、そいつんどこ行つて文句言つてやるよ」

祥子「(ちよつと笑つて) そんなのもう覚え
てない」

陽一「でも……」

祥子「陽一って、相変わらずバカだけど、
そういうところ好きだったよ」

陽一「バカは余計だ……」

祥子、ふと足元を見ると折り紙のツルが落ちている。

ツルを拾い境内を振り返ると、社殿の奥に千羽鶴が奉納されている。

祥子「ツル……」

陽一「ああ、落ちちゃったのかな」

祥子「ねえ、覚えてない？ 小学生の頃、交通事故で入院した、誰だっけ……山下君だ。ほら、クラスみんなで分担で千羽鶴折った」

陽一「……そんな事あったっけ」

祥子「あったよ。わたし前の日まで、自分の分の折るの忘れてて、泣きながら夜中に折ったの」

○小川家・居間・深夜(2003年1月)

机の上にたくさんツルの折り紙。

半分涙目を浮かべ、ツルを折る祥子。

寝間着姿の佳代子が来る。

佳代子、向かいに座り、何も言わず

にツルを折るのを手伝う。

祥子「……いい」

佳代子「でも間に合わない」

祥子「一人で出来る」

佳代子「そんな悲しい気持ちで折ったら、

お友達、元氣にならないよ」

祥子「……」

黙々とツルを折る二人。

祥子「……なんで？」

佳代子「ん？」

祥子「なんでお母さんは、何にもなかった

ようにしてられるの？」

佳代子「何のこと？」

祥子「お父さんのこと」

佳代子「……お父さんの、なに？」

祥子「お父さん、今どこにいるの？」

佳代子「……知らない、お母さん」

祥子「ウソ！」

佳代子「でも……本当に知らないよ」

祥子「……」

○小川家・居間・夜（現在）

テレビを見ている千夏。

風呂上がりの祥子が来る。

祥子「ちーちゃん、お風呂」

千夏「（テレビに夢中で）……うん」

が、テレビに集中して動かない千夏。

祥子「ねえ、ちーちゃん？」

千夏「これ見たら入る」

祥子「お姉ちゃんと東京行かない？」

千夏「（振り向いて）え？」

祥子「東京で一緒に暮らそう」

千夏「この家はどうするの？」

祥子「売るの。そしたら、ちーちゃんの手
きたがってた、調理の専門学校も行かせ
てあげられるし」

千夏「本気？」

祥子「うん」

千夏「……そうか」

祥子「いや？」

千夏「……ううん、それもいいかもね。あ、

じゃあ、お姉ちゃん、わたし、高円寺行

ってみたい」

祥子「どこでも連れてってあげるよ」

千夏「やった！」

○走る軽トラ・翌朝

「函館市街を走る軽トラ。」

正面にスピーカーがついている。

荷台の上にはダンボールに詰められ
た佳代子の雪のした野菜。

○軽トラ・車内・朝

運転する祥子。

助手席に千夏。

千夏「お姉ちゃんが運転してるの、何か不
思議な感じ」

祥子「これも手伝ってたの？」

千夏「ときどき」

祥子「そう……」

千夏「お母さん、お父さんがいなくなつた
から、野菜を売る仕事始めたんだよね？」

祥子「うん」

千夏「何で野菜だったのかな？」

祥子「その前から家で食べる野菜は作ってたよ。お母さんの実家、農家だったし」

千夏「ふうん。でもお母さん、すごいな。それで、わたしとお姉ちゃん、ちゃんと育ててくれたんだもん」

祥子「……」

千夏、車内のあるスイッチを押すと、外のスピーカーから音楽（ジャニス・イアン『ウィル・ユー・ダンス』）が流れた。

その音楽に佳代子の録音した声が入る。

『甘〜い、甘〜い、野菜。雪の下でひと冬眠った甘くて美味しい、佳代子の雪のした野菜〜』

祥子「……なにこれ？」

千夏「駅の近く来たら、いつもこれ流すの。お母さんの声、かわいいでしょ？」

祥子「……」

○走る軽トラ・朝

スピーカーを流しながら走る軽トラ。

○函館朝市・広場・朝

空いたスペースに停まる軽トラ。

降りる祥子と千夏。

祥子「お客さんなんて、来るの？」

千夏「いいから見えて」

しばらくして、朝市で働くおばさんが来て、

市場のおばさん「あら、やっと来た」

千夏「おはようございます」

市場のおばさん「もう、待ちくたびれた」

千夏「遅くなって、ごめんなさい」

市場のおばさん「今日は、お母さん来てないの？」

千夏「今日はちよつと……その代わり、お姉ちゃん連れてきました」

市場のおばさん「あらそう。よく似てるわ」

祥子「(会釈して)」

市場のおばさん「あんたのお母さんの野菜、

本当、甘くて美味しいの。みんな毎年楽しみにしてるのよ」

祥子「……ありがとうございます」

千夏「観光客より、この市場で働く人たちがみんな買っちゃうの」

市場のおばさん「じゃあ、この人参と大根、お願いね」

千夏「ありがとうございます！ お姉ちゃん、袋取って」

祥子「あ、うん」

見ると、軽トラに向かって市場の人が集まって来ている。

祥子「……」

× × ×

テキパキとした動作で客の対応をする千夏。

軽トラの周りに人々が集まり賑わっている。

祥子、ぎこちないながらも一生懸命、千夏を手伝う。

○陽一のカフェ・店内

赤レンガの並ぶ函館ベイエリアにあ

るオシャレなカフェ。

千夏「ビックリしたでしょ？」

祥子「そりゃね。あんなに人来るなんて思わなかった」

千夏「だんだん口コミで広まって、今はもう毎年あつという間に売り切れ」

祥子「お母さんが死んだ事、なんで言わなかったの？」

千夏「……なんとなく」

祥子「……」

陽一、ドリンクとデザートを運んで持ってくる。

陽一「いらつしゃい」

千夏「ありがとうございます！　すごく感じのいい店ですね。これなら東京でもやれますよ」

陽一「そう？」

千夏「そうだ、田所さんも一緒に東京行きませんか？」

陽一「え？」

祥子「変なこと言わないで」

千夏「変かな？」

陽一「いや……まあでも、俺は少し賑やかな田舎の方が性に合ってるかな」

千夏「でも、高校の時、お姉ちゃんと東京に駆け落ちしようとしたんですよね？」

どっちが言い出したんですか？」

祥子「ちーちゃん、しつこいって」

陽一「まあ、言い出したのはどちらかって言うと（チラッと祥子を見て）」

祥子「してないの」

千夏「え？」

祥子「結局しなかったの、駆け落ちなんて」

○小川家・近くの道（2010年10月）

陽一の漕ぐ自転車の荷台に乗って帰ってくる高校生の祥子（18）。

祥子「（降りて）ありがとう」

陽一「……本当にやるの？」

祥子「やるよ」

陽一「やっぱ卒業してさ、ちゃんと親に許してもらって、それからでも」

祥子「それ駆け落ちじゃないよね？ わた

し、駆け落ちがしたいの」

陽一「なんで……」

祥子「じゃあ、来週やるから」

○同・庭

帰ってくる祥子。

佳代子（37）が畑作業をしているのが見える。

佳代子「（祥子に気づき）おかえり」

祥子「……」

祥子、何も言わず家の中に入っていく。

○同・居間・夜

夕食を囲む祥子、佳代子、千夏（11）。

黙々と食べる祥子。

佳代子「祥子、明日、進路面談でしょ？」

お母さん何時に行けばいい？」

祥子「……いつでも」

佳代子「いつでもってことないでしょ」

千夏「進路面談って何？」

佳代子「お姉ちゃんの将来を先生と一緒に
相談するの」

千夏「お姉ちゃん将来、何になるの？」

祥子「……さあ」

佳代子「お母さんにも教えてくれないの。」

秘密たくさんあるのよ」

祥子「秘密あるの、お母さんの方だよ」

佳代子「どういう意味？」

祥子「ずっと、わたしたちに隠してる事あ
るでしょ？」

佳代子「たとえば？」

祥子「たとえば……」

佳代子「……」

祥子「もういい！」

出ていく祥子。

千夏「お姉ちゃん、どうしたの？」

佳代子「さあ、どうしたのかな……」

○高校・教室

進路面談をする佳代子と祥子と担任。

担任「それで祥子さんの進路ですが……」

祥子「駆け落ちします」

担任「は？」

佳代子「……」

祥子「わたし、来週、駆け落ちします」

祥子、佳代子をじつと見る。

担任「何言ってるんだ？　今、冗談言う時間

じゃないぞ」

祥子「冗談じゃありません。相手は三組の

田所君です」

担任「あんな……」

佳代子「先生、じゃあ、この子の進路、駆け落ちでいいです」

祥子「！」

担任「お母さんまで何を……」

佳代子「この子が、それで幸せになれるなら、なんだっていいんです」

祥子「……」

○陽一のカフェ・店内（現在）

千夏「三者面談でそんな事言っただけ？」

お姉ちゃん意外と大胆……」

祥子「でも結局しなかったのよ、駆け落ちなんて」

陽一「出来るわけないべ。あの後、学校中にウワサ広まって、えらい騒ぎになったんだから」

祥子「だから、もう昔の話だって」

○軽トラ・車内・夕

家に向かって運転している、祥子。

千夏、窓外の街並みをぼんやり眺めている。

千夏「……ねえ、お姉ちゃん」

祥子「ん？」

千夏「わたし、わかってるよ」

祥子「何が？」

千夏「本当は、駆け落ちなんてする気なかったんでしょ？」

祥子「……」

千夏「お母さんの事、困らせたかっただけなんだよね？」

祥子「どうだろう……」

千夏「わたし、なんとなく覚えてる。お姉ちゃんとお母さんが、ぎこちない感じになったのって、お父さんがいなくなった頃だったって」

祥子「……」

千夏「それまで、お姉ちゃんとお母さん、すごく仲が良かったのに……何かあったの、お父さんの事で？」

祥子「……何もないよ」

千夏「だったら、なんでもう少し仲良くしなかったの」

祥子「別に仲悪いとかじゃ……」

千夏「可哀そうだよ、お母さん……」

祥子「だから、そういうんじゃない」

千夏「（突然、大声で）可哀そう！」

祥子「……ちーちゃん」

○道ばた・夕

路肩に停車する軽トラ。

○軽トラ・車内・夕

手で顔を押さえたまま涙を流す千夏。

千夏「わたしね、お姉ちゃんから来たメール、全部、お母さんに見せてあげてた。そして、お母さんすごく喜んで……お姉ちゃんが東京でどんな仕事して、どこで美味しいもの食べたとか、そんな普通のメール、何度も何度も読み返してたんだよ。わたし、何度も連絡したらってお母さんに言っただの。でもお母さん、いいんだって、このメール読んでるだけで十分幸せだった」

祥子「……」

千夏「お母さん、可哀そうだよ……可哀そう」

祥子「……ごめん」

千夏「ごめん……なんか突然来た。お母さんいなくなったこと……今、来た……」

祥子、千夏の肩を抱く。

千夏、祥子の肩にもたれかかる。

祥子「……ごめんね」

○美和の家・玄関・夜

祥子、佳代子の野菜が詰まったダン

ボールを美和に渡す。

美和「本当にいいの全部？」

祥子「これで最後なんです。おばさんには

お世話になったから」

美和「じゃあ、ありがたく」

祥子「あの叔母さん……あの家、売れませ

んか？」

美和「え？」

祥子「あの家売って、ちーちゃん、東京に

呼ぼうかなって」

美和「そうなの……まあ、ツテがないこと

もないけど、いいの？」

祥子「いいんです。ただ……」

美和「ただ？」

祥子「あの畑だけ、そのまま残しておいて

ほしいんです」

美和「畑って、佳代子の畑？」

祥子「……はい」

美和「どうして？」

祥子「まだ残ってるので」

美和「残ってる？」

祥子「お母さんのタマシイ……」

美和「……」

祥子「……冗談です」

○小川家・畑・早朝

朝靄の漂う畑。

スコップを持って来る祥子。

畑には雪が白く積もっている。

祥子、スコップで地面を掘りはじめる。

やがて土の中からどす黒く変色したムシロが現れる。

祥子、土を払いのけ、ムシロの端に手をかけると勢いよく、はぎ取る。

人型の人骨が現れる。

祥子「！」

佳代子の声「ダメって言ったのに」

祥子、振り返ると、死んだはずの佳代子が目の前に立っている。

祥子「お母さん……」

佳代子「お母さん、言ったよね。春の雪解けの水が流れる前に、絶対に掘り起こしちゃだめだって」

祥子「……」

○小川家・子供部屋・朝

ハッと目覚める祥子。それは夢だった。

枕元の携帯が振動している。

電話に出る祥子。

祥子「……はい」

陽一の声「あ、俺。陽一」

祥子「何？」

陽一の声「あのさ、ずっと言うか、どうか迷った事あつて……」

祥子「だから何？」

陽一の声「祥子の父さんと逃げた女いるだろ？ 実は、こつち帰つて来てるみたいなんだ」

祥子「……」

陽一の声「それが今もスナックやってて、店の名前も同じなんだつて。笑えるだろ」

祥子「それって他の人も知ってるの？」

陽一の声「いや、多分知らないんじゃないかな」

祥子「そう……」

陽一の声「祥子の父さんがそこにいるのかどうかも、ちよつと分からない」

祥子「わかった。ありがとう教えてくれて」

祥子、電話を切る。

祥子「……」

○湯の川温泉街・通り

温泉や旅館が並ぶ通り。

その通りにひっそりと佇む喫茶兼スナック。

喫茶スナック『A K E M I』の看板。

○『A K E M I』・店内

カウンターとテーブルの薄暗い店内。

客は一人もいない。

カウンターの中で煙草を吸っている

大城朱美（40）。

祥子、入つて来る。

朱美「いらっしやい」

祥子、カウンターに座る。

朱美、水の入ったコップを置く。

朱美「何にします?」

祥子「……コーヒー」

朱美「はい」

朱美、その場で豆を挽き、サイフォ
ンにコーヒーの粉を入れる。

祥子、朱美を見つめている。

朱美「驚いた?」

祥子「え?」

朱美「こんな場末の喫茶で、わりと本格的
なコーヒー淹れてて」

祥子「いえ……」

朱美「コーヒーだけはこだわってんのよ。

他の事は、どうでもいいんだけどね」

祥子「……」

朱美「それで、何しに来たのかな?」

祥子「……」

朱美「わたしさ、一度会った人の顔忘れな
いの」

祥子「……」

朱美「あなた、あの時小学生? でも面影
すぐ残ってる」

祥子「……いつ戻って来たんですか?」

朱美「もう5年よ。東京や名古屋、いろん
な都会流れてみたけど、結局、どこ行っ
ても同じ」

祥子「……」

朱美「それ聞きに来たの?」

祥子「……町に戻らないんですか?」

朱美「あの田舎町に? 冗談、あんなとこ

戻るわけないでしょ」

祥子「……そうですか」

朱美「それだけ？」

祥子「……はい」

朱美「変な子ね……」

× × ×

祥子、お金をカウンターのの上に置く。

祥子「ごちそうさまでした。コーヒーすごく美味しかったです」

朱美「ありがとう」

出ていこうとする祥子。

朱美「ねえ」

祥子「……はい」

朱美「あなたからも、あの町の連中に言つていてくれないかな？」

祥子「え？」

朱美「なんか知らないけど、あの町でわた

しとあんたの父さん、一緒に駆け落ちした事になってんでしょ？」

祥子「……」

朱美「そんなのしてないし。あなたも知ってるでしょ？ だから、ちゃんとやっといてくれないかな」

祥子「……」

○小川家・佳代子の部屋・夜

簡素な部屋。

佳代子の遺品を整理する千夏。

○同・廊下・夜

携帯で話している祥子。

祥子「はい、明日、いったん東京に戻って
明後日には出社します」

千夏の声「おねえちゃん！」

祥子「（うるさいので□元を塞ぎ）いえ、もう大丈夫ですので、はい、ご迷惑おけしませんが」

千夏の声「ねえ、おねえちゃん、こつち来て！」

○同・佳代子の部屋・夜

入って来る祥子。

祥子「何？」

千夏、預金通帳を見せて、

千夏「こんなの、あった！」

表紙には（オガワチナツ）の印字。

千夏「（通帳をめくり）お母さん……ずっと

前から貯金してくれてたんだ……」

祥子「……」

千夏「どうしよう？」

祥子「もらえばいいよ。それ、ちーちゃん
のだから」

千夏「でも……」

祥子「わたしももらったの。ここ出るとき」
千夏「そうなんだ……」

畳の上に広げられた佳代子の持ち物は
は数えるほどしかない。

千夏「なのに、お母さん、自分のものは何
にも持ってなかったんだね……」

祥子「……」

千夏「お姉ちゃん、何か欲しいものある？」

祥子「わたしは……いい」

千夏「でも何かひとつくらい……」

千夏、タンスの抽斗の奥から何かを
見つけて取る。

千夏「何だろ、これ？」

それは丸めた画用紙。

祥子「！」

画用紙を広げて見ようとする千夏。

祥子「ダメ、見ちゃ！」

祥子、千夏から画用紙を奪う。

千夏「お姉ちゃん……」

祥子「ごめん……これ、もらう」

○同・庭・深夜

祥子、足元で小さな薪が火を燃やしている。

手にはさきほどの画用紙を持っている。

祥子、画用紙を広げて見る。

祥子「(ぽつり) なんでこんなの取つといた

の、お母さん……」

画用紙の上に落ちる一滴の涙。

それは小学生の時、祥子が書いた佳代子の似顔絵。

画用紙の一面に赤黒く変色した血が

染みついている。

祥子「わたし、ずっと待ってたんだよ……

あの日のこと、お母さんの口で言っても
らうの……そしたらわたし、お母さんの
味方だよって、そう言つてあげられたの
に……それなのに、なんで黙って逝つち
やつたの……お母さん」

祥子、画用紙を火の中に落とす。

火に照らされる祥子。

画用紙が燃えるのを眺めている。

○小川家・子供部屋・朝（2002年12月）

眠っている祥子と千夏。

祥子、大きなもの音がして目を覚ます。

階下から佳代子と修二が言い争う声が聞こえる。

○同・廊下・朝

祥子、階段を降りてくる。

奥の台所で佳代子と修二がもみ合っている姿が見える。

○同・台所・朝

流し台に作りかけの朝食の具材と包丁が置かれている。

修二にすがりつく佳代子。

修二、必死に振り払おうともがく。

修二「離せ！」

佳代子「お願いします、それだけは持つていかないでください」

修二の手に二つの預金通帳。

佳代子「子供たちのために少しずつ貯めてるんです。いつか、あの子たちに必要なんです」

修二「何言ってるんだ、もとは俺の稼いだ金だろ、ふざけるな！」

○同・廊下・朝

呆氣に取られて見る祥子。

朱美の声「……早くしてくんないかな」
祥子「！」

声の方を向くと、玄関に朱美（25）

が立っている。

朱美「おはよう」

祥子「……」

朱美「言っとくけど、わたし、どっちでもいいの。あんたの父さんが、どうしてもついてくつて聞かないだけ」

祥子「……」

○同・台所・朝

もみ合う佳代子と修二。

修二「こんな田舎くさい場所、もうウンザリなんだよ！　どいつもこいつも俺のこ
と、小馬鹿にした目で見やがって、俺が
どんなに優れた人間か、この町の連中は
わかってないんだ！」

佳代子「わかりました、行ってください。

でもその通帳だけは……」

○同・廊下・朝

朱美「ああ、もう面倒くさいな！（台所に
向かって）あのさ、いいよもう。わたし
一人で東京行く！」

朱美、出て行く。

○同・台所・朝

修二「朱美ちゃん、ちょっと待ってて！

どけよ！」

修二、佳代子を蹴り倒す。

佳代子「あ！」

流しに体を強く打ち付けて倒れる佳
代子。

その拍子に流し台の包丁が床に落ち

る。

修二、倒れた佳代子を憎しみの目で
見降ろす。

修二「分かってたんだ、ずっと……」

佳代子「……」

修二「お前、一度も俺を愛したことなんて
なかっただろ？」

佳代子「……」

修二「醜いお前が俺をずっと醜い目で見て
たのわかってたんだ……」

佳代子「……」

修二「醜いくせに……醜いくせに、お前も
俺をずっと馬鹿にしてた！」

修二、倒れた佳代子のアザを足で強
く踏みつける。

憎しみと苦しみが混じり涙を浮かべ

る修二。そのまま佳代子に跨ると首
を絞めはじめる。

佳代子「やめて……」

もがく佳代子、その手が床に落ちた
包丁を掴む。

○同・玄関・外・朝

朱美、外に停めた車に乗り込みエン
ジンをかける。

祥子、玄関の外に出て見ている。

朱美「（祥子に手を上げて）じゃあね」

と、朱美、車を発進させる。

黙って見送る祥子。

と、言い争いの音が止んでいるのに
気づき家の中を振り返ると、台所で
呆然と立ち尽くしている佳代子の姿

が見える。

修二の姿は消えている。

祥子「お母さん……」

見ると、佳代子の手には血のついた包丁が握られている。

冷蔵庫に貼られた佳代子の似顔絵に血しぶきがついている。

祥子、視線を下にやると床にダラんと転がった修二の足が見える。

その床に血が流れている。

祥子「……」

放心したまま動かない佳代子。

騒ぎを聞きつけた隣人のおばさん（＝会葬者（女１））が来る。

隣人のおばさん「祥子ちゃん、どうしたの？」

祥子「！」

祥子、咄嗟に玄関の扉を閉め、家の表に飛び出す。

祥子、向こうで走り去る朱美の車に向かって、

祥子「（車に向かって）お父さん！ 何で行っちゃうの、お父さん！」

祥子、隣人がその光景を目撃したのを確認し、家の中に戻り、玄関の扉の鍵を閉める。

○同・玄関・朝

祥子「（息切れして）」

台所にいる佳代子はまだ固まったまま茫然としている。

祥子「お母さん……」

と、台所へ向かおうとする祥子だが、

階段から千夏が降りてくるのが見える。

千夏「お姉ちゃん、うるさい……」

祥子「！」

祥子、階段を駆け上がり千夏の手を掴む。

祥子「ちーちゃん、お姉ちゃんと遊ぼう」

千夏「え？」

祥子「二階でゲームしよ。お姉ちゃんのプレイステで今日ずっと遊ばせてあげる」

千夏「ほんと？」

祥子、そのまま千夏を二階の子供部屋に連れ戻す。

○同・子供部屋（時間経過）

ゲームのコントローラーを持って、

うつらうつらする千夏。

祥子「ちよつと寝る？」

祥子、枕を置いて千夏を横に寝かせる。

千夏「……お腹空いた。お母さんは？」

祥子「あとで、お菓子持って来てあげるから、少し寝な」

千夏、目を閉じて眠りにつく。

祥子「（ホッとして）」

○同・台所

祥子、来る。

台所には誰もいない。

台所は片づけられ、床の血の跡もキレイに拭き取られている。

冷蔵庫に貼られていた佳代子の絵も

なくなっている。

祥子「……」

○同・畑

祥子、来る。

佳代子、クワで地面を耕している。

祥子「お母さん……」

佳代子「……」

祥子「何してるの？」

佳代子「お母さん、来年から野菜売ることにした」

祥子「……」

佳代子「心配しなくていい。お母さん、ちゃんとするから。あなたたちのこと、ちゃんと育てる」

祥子「……お母さん」

佳代子「昔ね、お母さんの実家で雪のした

野菜、作ってたの。一度、野菜を雪のしたに埋めたら最初の雪解けの水が流れるまで絶対に掘り返しちゃダメなの……それが野菜を美味しくさせる一番の秘訣」

祥子「お母さん……お父さんは？ お父さん、どこ？」

佳代子「……」

祥子「ねえ、お母さん！」

○道・早朝（現在）

まだ暗い夜明けの道。
祥子、走っている。

○美和の家・玄関外・早朝

玄関の扉を叩く祥子。

祥子「おばさん、様子です。開けて！ 叔

母さん、叔母さん！」

玄関の明かりが点き、寝間着姿の美和がドアを開ける。

美和「祥子ちゃん……どうしたの？」

祥子「叔母さん……お父さん、探すの手伝ってください」

○小川家・畑・早朝

美和の車のヘッドライトで畑を照らしている。

スコップで地面を掘る祥子。

美和「ねえ祥子ちゃん、もう一回ちゃんと説明して……」

祥子「お父さん埋まつてるんです。きつとこの畑のどこか……お父さん、まだ埋ま

つてるの」

美和「本気で言ってるの？」

祥子「わたし、あの日、見たんです。お母さん、お父さんのこと……」

すると地面の中から古い黒く変色したムシロが現われる。

祥子「！」

表面の土を払いのける祥子。

ムシロの隅に手をかける。

美和「祥子ちゃん……」

祥子、意を決しムシロをめくる。

が、ムシロの下にあったのは、修二の死体ではなく、まだ残っていた、佳代子の雪のした野菜。

祥子「……」

○小川家・縁側・早朝

日が昇り明るくなっている。

縁側に並んで座る祥子と美和。

美和「小さい頃の記憶って、自分の願望なんか混じって、実際は起きてないことも、本当に起きたように思うときがあるの。叔母さんも、小さい頃、カッパ見た記憶あるもの」

祥子「……でもあの絵の血」

美和「本当に血だった？　ちゃんと確かめたの？」

祥子「それは……」

美和「お父さん、あの日一人でいなくなっただけなんだよ、きつと」

祥子「……」

美和「じゃあ祥子ちゃんは、その事、直接、

佳代子に聞いた？」

祥子「……」

○道（2011年3月）

キャリーバッグを転がしながら歩く、

祥子（18）。

少し後ろをついて歩く佳代子。

○駅・プラットホーム

並んで立つ祥子と佳代子。

電車がホームに入って来る。

祥子「じゃあ行くね……」

佳代子「元気でね」

電車に乗り込もうとする祥子。

と、振り返り、

祥子「お母さん……」

佳代子「ん？」

祥子「本当のこと教えて」

佳代子「本当のこと？」

祥子「お母さんが、お父さんにしたこと

……お父さん、包丁で……」

佳代子「……」

祥子「ねえ、何で信じてくれないの。わたし何があってもお母さんの味方なんだよ。ずっとずっとお母さんの味方なの！だから教えてほしいの、本当のこと。お母さんの言葉で……」

佳代子「いいよ、教えてあげる」

祥子「え……」

佳代子、祥子の耳元に口を近づける。

何かを囁く佳代子。が、出発のベルが鳴りだし祥子には聞こえない。

祥子「え、何て言ったの？」

佳代子、持ってきた通帳を祥子の手
に預け電車に押し入れる。

閉まる電車の扉。

祥子「お母さん！」

祥子、客席に行き、窓を開ける。

電車が走りだす。

佳代子、電車を追う。

佳代子「もう帰って来なくていい」

祥子「え？」

佳代子「お父さんの事もお母さんの事も、みんな忘れて、あなたはあなたの人生を生きて！」

祥子「お母さん！」

佳代子「あなたは、あなたの美しい人生を生きて、それがお母さんの願い！」

祥子「お母さん！」

ホームから遠ざかる電車と佳代子。

○小川家・縁側（現在）

祥子「……それが母と交わした最後の会話でした」

美和「……」

祥子「母はわたしの事、ずっと遠ざけたかったんです」

美和「それは違うわ」

祥子「え……」

美和「……祥子ちゃんが東京に行って少ししてかな。わたしね、佳代子、誘って町に出掛けたの。寂しがってると思って。そしたら、あの子、突然、クモの話しなんかはじめたの」

祥子「クモ？」

○喫茶店（2011年5月）

クラシック音楽の流れるモダンな喫茶店。

向かい合って座る、佳代子と美和。

佳代子「お姉ちゃん、覚えてない？ 小学生の頃、一緒に見た教育テレビのクモのドキュメンタリー番組。砂漠に住むクモ。とても醜いクモ。そのメスクモは、子供が生まれると自分の内臓を溶かして子供に食べさせるの。どうしてかっていうと砂漠には他に食べるものがないから。それでね、お腹を空かせたオスクモは自分の子供を食べようとするの。メスクモはそんなオスクモから必死で子供を守るの。」

るのかな？」

○小川家・外（現在）

車に乗った美和を見送る祥子。

祥子「いろいろ、ごめんなさい……」

美和「いいのよ。ねえ、祥子ちゃん、もし、あの家売るにしても、またここに帰ってきてね」

祥子「……はい」

エンジンをかけて出発しようとする
美和。

美和「祥子ちゃん、もし仮に……あなたが
ずっと心に思っていたこと。それが本当
の事だったとしても」

祥子「え……」

美和「忘れなさい」

そして最後は心臓以外の内臓全てを溶かして子供に与え、カラカラになって死ぬのよ。目を背けたくなるくらい気持ち悪い映像だった。でも見終わった後なんかね、そのメスクモがすごく美しく思えたの……お姉ちゃん、わたし、子供が生まれた時ね、あのメスクモになろうって決めたのよ。自分の内臓を溶かしてでもこの子たちを守ろうって。子供たちが、別の世界に飛び立つまで。その後なら、わたしはカラカラになって死んでもいい……わかつてるよ、変な妄想だって。でもやめられないの。考えるのをやめられない。ねえ、お姉ちゃん、もしもそんなふうに生きられたら、こんなわたしも、美しい人生を生きたって思えるようにな

祥子「……」

美和「全部、忘れるの……それが佳代子のためだから」

祥子「おばさん……」

美和「じゃあね」

美和、車を発進させて去る。

祥子「……」

○同・居間・朝

朝食を食べる祥子と千夏。

佳代子の野菜で作ったサラダを食べる祥子。祥子は初めて佳代子の野菜を食べる。

祥子「……美味しい」

千夏「お母さんのは特別なの」

祥子「そうだね」

千夏「あのね、お姉ちゃん……わたしやっぱり、この家に残る」

祥子「え？」

千夏「お母さんの野菜、代わりに作ってみようって思ったの」

祥子「……」

千夏「ダメかな？」

祥子「ううん……じゃあ、わたしもときどき、

手伝いに戻る」

千夏「お姉ちゃん……」

祥子「一人より、二人の方がいいでしょ？」

千夏「嬉しくて」うん……でも作れるかな、お母さんみたいに」

祥子「昔、お母さんが教えてくれた。一度、

雪の下に埋めた野菜は春が来て、雪解けの水が流れるまで絶対に掘り起こしちゃ

だめだって……でも、お姉ちゃん、一度だけ、掘り起こそうとした事があったの」

祥子「……」

祥子、土を払いのけムシロの隅に手をかける。

○小川家・子供部屋・早朝（2003年1月）
祥子（10）、目を覚ます。

意を決し、ムシロをめくり上げようとする。

窓の外、雪がチラチラ降っている。

と、視界が突然、真っ暗になる。

○同・畑・早朝

早朝の誰もいない畑。

佳代子が祥子を後ろから目隠ししている。

雪が積もっている。

スコップを持ってやって来る祥子。

その姿勢のまま、しばらく、どちらも身じろぎしない。

祥子、スコップで地面を掘り起こしだす。

と、佳代子、祥子の手に手を重ねムロシをそつと元の位置に戻す。

白い息が空中を舞う。

祥子「……」

一心不乱に掘りつづける祥子。

佳代子「……」

やがてムシロが現われる。

やがて、祥子の耳元に向かって、囁

く佳代子。

佳代子「だあれだ？」

(終わり)

本電子書籍は、2017年12月1日発行の『第23回函館港イルミネーション映画祭2017 第21回シナリオ大賞・受賞作シナリオ集』より、大森一樹賞（審査員特別賞）受賞作品を抜粋したものです。

シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第23回函館港イルミネーション映画祭2017

第21回シナリオ大賞 大森一樹賞〔審査員特別賞〕受賞作品

雪のした

作：村口知巳

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

2018年2月1日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒040-0055 函館市末広町4番19号（函館市地域交流まちづくりセンター内）

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：株式会社新函館ライブラリ

〒040-0051 函館市弁天町4番8号

電話 0138-84-1620 <http://www.nhakodate.com/>
